

1. ライフステージ別に乳がん検診を考える

鈴木 昭彦 東北医科薬科大学乳腺内分泌外科

人生100年時代などと言われ始めた現代において、健康寿命の延伸は、個人にとっても社会にとってもきわめて重要である。がん医療においては新規治療法の開発、テーラーメイド医療の実現などが寿命の延長に大きく寄与するが、適切な検診による早期発見、早期治療もまた、QOLを保った延命に対して大いに貢献しうると思われる。長い人生においては、社会的にも生物学的にもさまざまなライフステージを経験するため、それぞれのライフステージに最適な検診を選択することは、健康長寿の増進に向けて意義があると考える。

女性の一生におけるライフステージ

女性は卵巣から分泌される女性ホルモンの働きにより、思春期、成熟期、更年期、老年期と劇的な身体的変化を伴うライフステージを経験する。乳房自体がこれらの変化と呼応する形で変化すること、乳がんの罹患頻度も加齢とホルモン環境との影響を受けながら変化していくため、それぞれのライフステージで検診を受診することのリスクと、得られるベネフィットとのバランスに考慮した検

診体制の構築が望まれる。

また、結婚、妊娠・出産、子育てのような社会的なライフステージを経験する中で、就労を続ける、離職するなど検診の環境としては大きな変化の要因である。就労している女性は住民検診の対象とはならないため職域での検診がメインとなるが、住民検診とは異なり、職域の検診ではがん検診の法的な根拠はなく、検診の手法や精度管理などの基準がないことが問題である。

ライフステージ別の乳がん検診

1. ホルモン環境に伴うライフステージ

ホルモン環境に伴うライフステージと乳がん検診との関連においては、思春期・成熟期 [いわゆるAYA (adolescent and young adult) 世代], 更年期 (閉経前), および閉経後・老年期に関して考察したい。

1) 思春期・成熟期

この世代、特に20歳未満の乳がん罹患はきわめてまれであり、検診の対象となることはない。乳がんの罹患は20歳代から徐々に増え始め、30歳代女性の悪性腫瘍では最も多い部位が乳房となっている(図1)。近年、有名芸能人の若年発症乳がんが話題となったこともあり、この世代での検診に関しても注目されているが、一般リスクの40歳以下の女性に乳がん検診を勧める科学的根拠は存

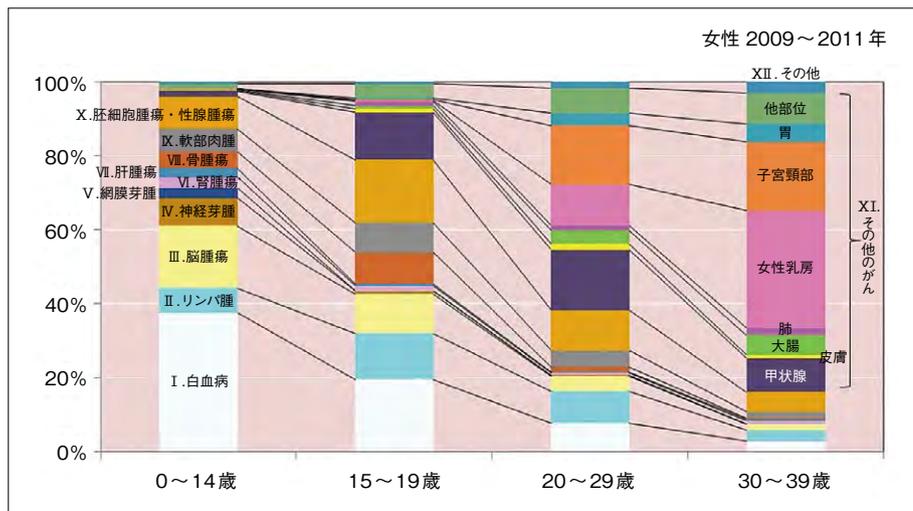


図1 小児・AYA世代のがん種の内訳 (資料：国立がん研究センターがん対策情報センター「がん登録・統計」)